「顔」という仕掛け
――カズオ・イシグロ『夜想曲』論

霍　　士　富

はじめに

カズオ・イシグロ『夜想曲集――音楽と夕暮れをめぐる五つの物語』（2009）は彼の初短編集であるだけでなく、初期の短編に比べて、極めて異彩を放っている。その異彩とは一つは、五つの短編がどれも音楽のリズムに貫かれていて、人生の悲哀をユーモアを交えながら描いている物語であるのに対し、初期の短編には音楽と物語との絡み合いがないことである。もう一つは、この短編集は「五楽章からなる一曲、もしくは五つの歌を収めた一つのアルバム」[1] のようなもので、その「五つの歌」は、どれも〈語り手〉の世界観を映す鏡のような作品だが、初期の短編にはそれが現れていない――そこにあるのは、彼の長編に見られるように、過去の記憶を語ることによって、「自分の人生を振り返って、『自分が最も誇りを持っていたものや自分の偉業は、実際は自分が恥ずべきことだった』ということに気付くような人々」[2] ――である。従って、この短編集はイシグロ文学にとって、特別な位置を示すものである。それを解明することによって、彼の文学の見取り図を透視することができると思われる。

『夜想曲』の冒頭、「二日前まで、おれはリンディ・ガードナーのお隣さんだった」と〈語り手〉の「おれ」は語り始める。「おれ」はサックスの「メジャーになる素質は十分」あるのに、醜男で大スターになれない。女房のヘレンは、高校時代の知り合い、プレンダガストと一緒になると決心し、「おれ」と別れる。その代わりに、プレンダガストは「おれ」を最高の外科医ボリスに整形させる金を出してくれると言う。「おれ」は「それはいやだ」と言いながら、マネージャーに唆されて、整形手術を受け入れる。そこで、同じ場所で同じ手術を受けたリンディ・ガードナーと一緒に夜の世界で冒険をする。手術が成功すれば、「おれ」は、新しい顔が出来た時、ヘレンが戻ってくると想像し、人生の転換を望んで結末に至るのである。

鷲野博文は、「正常な世界にいた主人公が、妻に逃げられ、マネージャーにそそのかされ、整形手術もいとわないリンディとともに夜のホテルを、いわば旅してまわることになるなど、狂人の世界に飲み込まれたようになっている。この狂人の世界とは、別の言葉で言えば、非日常の世界である。」[3] と指摘している。この見解のポイントは、主人公が「正常な世界」から「非日常の世界」、「狂人の世界に飲み込まれた」ことであり、極めて興味深い。即ち、「正常な世界」は現実の世界であるのに対し、「非日常の世界」は混沌とした世界の領域である。現在の「おれ」はこの混沌なる世界で、「醜男」の「顔」を映画スターのようにハンサムな「顔」に変貌させようとして、整形手術を受けている。この作品において、「顔」の課題は最も重要なポイントであるのに、いまだに論じられていない。

作家中島京子は「長編小説の印象も強いイシグロが手がけた連作短編集は、まさしく彼のコメディセンス全開、炸裂の一冊となった。副題が「音楽と夕暮れをめぐる五つの物語」とある。五つに共

通するのは、モチーフだけでなく、ベルリンの壁崩壊から9·11までという背景設定もあるようだ。」[4]という、意味深長な見解を提出しているが、テクストの「背景設定」と五つの物語に共通する「モチーフ」との間には、どのような関係があるのか。それが言及されていない。

以上のような問題を踏まえて、本論文は「顔」を重要な仕掛けにして論じたい。まず、日常の世界で、夫婦の危機をもたらした「顔」による価値評価のズレ、次に現実の空間から切断された非日常の世界で、「顔」を介さずに「おれ」とリンディが出会い、交流することの意味を明らかにしたい。そして最後に、「おれ」という物語の登場人物である一人称の〈語り手〉を相対化する＜機能として語り手＞[5]が、『夜想曲』という作品で、どのようなことを語ろうとしているかを解明したい。

一．顔による価値評価のズレ

『夜想曲』は「おれ」と自称する一人称の「語り手」が「二日前まで、おれはリンディ・ガードナーのお隣さんだった。」と、二日前までの出来事を過去に遡って語っている。そこで、まず、「おれ」の視点から認識された現実を見ていきたい。

マネージャーのブラッドリー・スティーブンソンの話によると、「おれ」はジャズ奏者になる素質は十分にある。「おれ」もそれを信じて生きて来た。トイレみたいな「個室」で練習したり、時にはうっかりして、「個室」の外でサックスを吹いたりして、隣人がドアをがんがんと叩きに来るほど、自らの腕を磨いていた。しかし、現実の世界では、いくら努力しても、メジャーなサックス奏者にはなれない。なぜなら、最近では、才能の価値は下落気味で、イメージや市場性、雑誌やテレビでの活躍、どのパーティに出て誰と昼飯を食ったか――そんなことが幅をきかせているからだと言う。それで、「おれ」がメジャーになれない理由は、醜男のせいにある、とマネージャーのブラッドリーにはっきり言われた。

> 「マーカス・ライトフットに、クリス・ブゴスキー。タレンティーニもだ。おまえみたいに専売特許の音色（ねいろ）を持ったのがいるか？　おまえの繊細さ、おまえの構想力、おまえのテクニック――半分でも持ってるやつがいるか？　いない。だが、あいつらは顔がいい。だから黙っててもドアが開く」（第180頁）

ここで分かるように、ブラッドリーは「おれ」の能力を十二分に認めていると同時に、「おれ」の致命的な欠点をもはっきりと指摘している。即ち、メジャーになった「顔がいい」やつらに比べると、「おれ」の唯一の欠点は「醜男」ということである。かくして、視点人物の「おれ」の価値観と、対象人物のブラッドリーの価値観のギャップがリアルに提示されている。現実の世界は、個人の「才能の価値」を評価するのではなく、まさに人間の「顔」を評価する時代である。言い換えれば、個人の夢――「夢のまた夢の中で見ている話」＝メジャーになる夢と、時代の風潮――「顔」の善し悪しで価値を評価する現実との衝突、そこで個人の理想は、いかに弱く、儚いものであるかは明らかである。従って、「おれ」の悲運は、個人から人間一般の悲劇へと転換していく。

「おれ」の視点から見れば、女房の「ヘレンはいろいろな面でいい女」である。安普請のアパートに住んでいて、借金を抱えていても、何の不満も言われたことがない。だが、「おれ」とブラッド

リーとの話＝「おれ」の顔にちょっとメスをいれると、世界は必ず変わる、という話を聴いたヘレンに、妙な変化が起こり始めた。ある日、ヘレンは電話を掛けてきて、「あなたと別れて、クリス・プレンダガストと一緒になります」と言う。ここで、ヘレンになぜこんな変化が起こったのか、「おれ」は分かっていない。即ち、視点人物の「おれ」は対象人物のヘレンの内奥を捉えられない。ヘレンは意識の底の識閾下に、現実の生活の不満を抱えているが、「おれ」は少しも察知していない。その不満の内実は、数週間後にヘレンが家に帰って自らの荷物を運ぶ時、悲しそうな口調で「おれ」に告げた内容によって明らかになる。

ヘレンは、高校時代から憧れていたプレンダガストと一緒になれて幸せだが、「あなたを捨てていくのは気がとがめる」と言い、色々なことを考えて“彼”と話し合った結果、「彼がお金を出すから、街一番の美容整形外科医に顔を整形してもらうってのはどう?」と提案する。「入院費も回復期間中の生活費も全部もつ。最高の整形外科医を頼んでいい」。「顔さえ直せば、もう怖いものはない」、「あなたは第一線に躍り出る。出ないわけがない。あなたの才能をもってすれば……」（第184－185頁）。この話によると、ヘレンの悲しさの内実は次のように考えられる。まず、ヘレンは「おれ」の実力を確実に信じていること。それは、「あなたの才能」なら、「顔さえ直せば」、第一線に躍り出ないわけがない、という言葉から十分に窺える。しかし、現実には、「おれ」の状況は「安普請のアパートに住んでい」るだけでなく、「借金」さえ抱えている。この現状に対するヘレンの不満は、平素水面に出てこなかったが、ついに爆発し、「おれ」と別れて、高校時代から憧れていたプレンダガストと一緒になると決心する。この現実と理想との間に挟まれたヘレンの悲しさは、何らかのはけ口を見つけなければならない。そこで、ヘレンは「いろいろ考えて彼と話し合った」結果、「おれ」に整形手術の費用を全部出すことになったのである。

実に、ヘレンの意識は、理性と感情の葛藤状態にある。そのため、ヘレンの提案――「おれ」と別れる代わりに、整形手術の費用を出すこと――に対し、「おれ」はずっと「うん」と言わないのを見ていたヘレンは、悲しい感情を抑えきれずに、次のように言う。

> 十五分後、アパートを出ながら、ヘレンはずっときつい口調で言った。「要するに何なのよ。残りの一生、あのクロゼットで演奏してれば幸せってこと？　いつまでもどんくさくありたいってことなのね？」そう言って、去っていった。（第185頁）

これこそ長い間、ヘレンの心に積み重なっていた不満ではないか。ヘレンは今まで、「おれ」の貧乏くさい「芸術家」の理想に一度も文句を言わなかった。だから「おれ」の視点から見た「ヘレンはいろいろな面でいい女だ」、というのは「おれ」にとって紛れもない真実である。だが、ヘレンの心中では、ずっと生活に不満を持っていたのも真実である。それは「おれ」への二つの詰問を考えればすぐに分かる。なぜ「顔」の整形を受けたくないのか、「あのクロゼットで演奏してれば幸せってこと？いつまでもどんくさくありたいってことなのね？」、この詰問は、実に「おれ」の心の闇に一筋の光を当てるものであった。はっきりと言えば、「おれ」も現状に対して満足していない。そうでなければ、「おれ」は一方で、美容整形の提案に反抗しながら、他方で素直に整形手術を受け入れるはずがない。

「おれ」はヘレンの提案をマネージャーのブラッドリーに話して聞かせた。一緒に笑い飛ばすつもりであったのに、彼はにこりともせずに、このように言った。

ヘレンの巧妙な計画なんだ。彼女の立場を考えてみろ。おまえを愛してる。だが、ルックスがセクシーじゃなくて、見せびらかすにはちょっと気がひける。その点をどうにかしてもらいたいのに、おまえは拒絶する。で、どうしたか。考えたすえの一手がすばらしい。デリカシーがあるな。プロのマネージャーとして頭が下がる思いだ。そうよ、男と出てったのよ。まあ、以前から惹かれるところはあったのかもしれん。だが、全然愛しちゃおらん。おまえの整形費用を払わせるだけが目的の男だ。だから、無事に整形がすめば、また戻ってくる。おまえはハンサムになってて、ヘレンはおまえの体にめろめろで、レストランで一緒のところを大衆に見てもらいたくてしかたがない……（第186－187頁）

「おれ」はこの話を受け入れて、いま高級ホテルの一室にいる。これがいわゆる「リンディ・ガードナーのお隣さん」になることになった経緯である。ここで、大事な問題がある。即ち、ヘレンの心にある真実とは何なのか。また、「おれ」の心にある真実とは何なのか。この点に関して、哲学者大森荘蔵は次のようなことを述べている。

カメレオンの本当の色は何だろうか。もちろんそんな色などがないことは誰でも承知している。木の葉の中での緑色、岩場の上での茶褐色、それぞれその場その場の色のどれもが真実の色であって、その中でこれこそ本物の色だというような色はありはしないからである。だがカメレオンや七彩変化（へんげ）の紫陽花（あじさい）とは違って、色変わりをしないものには「本当の色」がある、そう思う人もいるだろう。

しかし例えば着物の生地に本当の色といったものがあるだろうか。昼と夜、窓辺と部屋の隅、蛍光灯と白熱電球、生地をのせた台の色、見る人の眼の具合、こういった様々の状況でその生地は様々な色に見える。それらの様々な色の中でどの色がその「本当の色」だと言えるのか。（中略）真実とは貧しく偏頗なものではなく豊かな百面相なのである。[6)]

このように、真実とは、「貧しく偏頗なものではなく豊かな百面相なのである」。言い換えれば、ヘレンの提案に対し、マネージャーのブラッドリーの視点によって、捉えられた真実は、「おれ」と別れた時の「ヘレンの悲しさ」の内実を相対化し、確かに一理ある。だが、マネージャーと「おれ」との関係を考えれば、ヘレンの提案に対する、ブラッドリーの理解は明らかに商人らしい思い込みがあるのではないか。事実、「おれ」が手術を受けてから、ヘレンは見舞いにも来なかったし、これからも「おれ」のもとに戻る気配もなさそうである。

こうして、視点人物の「おれ」が対象人物のヘレンやブラッドリーに出会うことによって、次のような真実が露出してくるのである。一つは「ヘレンの悲しさ」の内実である。それは愛と不満な現実に挟まれて、なんとかその現実を突破しようとする悲しさである。第二に、「おれ」の不遇の普遍性である。「おれ」は「純粋芸術志向」ではなく、「金のためならじゃりんこ向けの音楽だって演奏する」ということは、理想と現実との衝突をリアルに露出させている。第三に、ブラッドリーの人生観である。この人生観は、世俗的なもののように見えるが、きわめて現実的である。現実は確かに個人の能力を評価するというより、その「顔」の価値を判断する世界ではないか。従って、この作品は、「おれ」の身に抱えている「矛盾」――「純粋芸術志向」と「金のためなら」――によって、現実における芸術家の悲劇をリアルに示唆しているだけではなく、夫婦の機微による危機と悲

哀を露呈しているのである。

二.「顔」のない出会い

「醜男」という「人相」に悩まされた「おれ」は、結局整形手術を受けることにして、日常の空間から離れた、ビバリーヒルズのホテルに連れてこられた。さらに、「夜陰に乗じて裏口から入り、この特別フロアまで車椅子で運ばれた。特別も特別、なにしろホテル本体から完全に切り離されているフロアだ」。こうして、「おれ」の身体がいかに、日常の空間から非日常の空間へと移されたかは明らかである。また、「夜陰に乗じて」という時間は、「おれ」が一気に秩序の世界から非日常の世界に移動させられたことを示唆しているのであろう。即ち、この「特別」な時空間で、「おれ」は日常の世界と切断され、「非日常の世界」で「目、鼻、口」だけ出ている状態で他者と付き合っていくのである。

手術を受けてから「おれ」は一週間、暗闇の中で過ごした。二週間目には、「おれ」は化粧台の前に立って、「鏡の中の奇怪なモンスターが」、「包帯の二つの穴からじっとにらみ返してくるのを見ていた」。「おれ」がどん底に落ちた気分の時に、看護婦のグレイシーは、リンディ・ガードナーがお隣さんだと教えてくれた。その名前を聞いて、「おれ」は「吐き気がするほどの嫌悪感に襲われた」。なぜなら、「おれ」はリンディのことを才能もなければ、演技もできず、「音楽に至っては才能があるふりすらできない」と思っているからである。「あの女がこれほど祭り上げられるのは」、芸能界の「例の方程式による」もので、「恋愛沙汰で騒ぎ、結婚で騒ぎ、離婚で騒ぐ、――これだ。これが芸能雑誌の表紙やらトークショーやらに道を開く」と軽蔑している。そのリンディが今、「おれ」の隣の部屋にいて、「おれと同じくボリス医師の整形手術から回復しつつある」。この事実は、何よりも「おれ」の「道徳的堕落のひどさを象徴的に物語」っていると「おれ」は感じている。

ここで、三点に注目したい。第一に、「おれ」の「顔」は包帯に包まれて、目だけ二つの穴で外の世界を見ている。勿論、これから出会うリンディも「おれ」と同じく「顔」はない。そこで「顔」のない人間同士の出会いは、何を意味しているか。第二に、「おれ」はあれほど芸能界の世界に嫌悪感を持ちながら、なぜ整形手術を受けて、芸能界のスターになろうとするのか。即ち、自らの行為を、これが「おれの道徳的堕落のひどさを象徴的に物語」っているとは、何を意味しているのか。第三に、「おれ」の視点から捉えた対象人物のリンディのイメージは、明らかに通俗的なものである。即ち、リンディに対する嫌悪と、自ら手術を受けてその芸能界のリンディみたいになりたい、という「おれ」の深層心理は、何を示唆しているのか。これから、この日常の世界から一旦切断された、非日常の世界での、「おれ」とリンディの出会いを見てみよう。

看護婦からリンディの手紙を受け取って、「おれ」は彼女についての「もろもろの思いは雲散霧消（うんさん むしょう）し、体内に興奮が湧き上がってきた」気持ちで、リンディの部屋を訪れた。今の「おれ」は「顔」に包帯が巻かれ、二つの穴（＝目）で他者を見ることしかできないことに注意したい。

> リンディ・ガードナーはおれより包帯の量が多かった。おれの場合、少なくとも頭のてっぺんには包帯がない。砂漠のオアシスに生えるヤシの木みたいに、そこから毛が飛び出している。だが、リンディは頭がすっぽり包帯の中だ。まるででこぼこのあるココナツで、そこに目と鼻と

口の穴があいている。あの大量な金髪はどこにいったんだ……わからん。だが、声には思ったほど締めつけられた感じがなくて、テレビで見聞きしているままの声だった。（第 193－194）

このように、リンディに対する「おれ」の心理変化――「嫌悪感」から「興奮」への転換は、何を語っているのか。これは、彼の言葉を借りて言えば、「おれも華々しい世界に思ったほど免疫がなかった」という内実をリアルに裏付けている。即ち、有名人に対する「おれ」の心理は、「おれら」の心理一般に通底しているのである。

また、今まで「おれ」は、テレビや雑誌の表紙などを媒介にしてリンディを見て来た。しかし、今日は二つの穴で、「そこに目と鼻と口の穴があいている」彼女を見たり、耳でリンディの「思ったほど締めつけられた感じがな」い「声」を聴いたりしたら、そのイメージはすっかり変わって、まるで別人である。まず、リンディは有名人らしからぬ人柄で、とても親しみやすい。それに、サックス奏者の話題になると、「昔ながらのプロのほうが学ぶことは多い。画期的な新しさはない」が、「確かな腕がある」という。この考えは極めて的確だと「おれ」は思っている。第三に、トニー・ガードナーの歌を聴きながら、踊り始めた眼の前のリンディの姿は、実に優美である。歌に合わせて、体の動きは力みがなくて優美、体形もまたスリムで優美だった。かくして、非日常の空間で、視点人物の「おれ」から捉えた対象人物のリンディのイメージは、世間でのそれをはっきり相対化させ、百八十度変わってしまう。言い換えれば、「おれ」はリンディに出会って、その付き合いは、「ホテル本体から完全に切り離されている」非日常の空間で、「顔」の価値で人間の価値が判断されることから免れている。それは「顔」を介さない、人間同士の付き合いである。従って、これこそ「おれ」とリンディとが出会う価値であり、「顔」なしの世界こそ、人間同士の本来の姿を見せることによって、現実世界の価値観を引っ繰り返すのである。

しかし、リンディと出会ってから、「おれ」は嫌気がさし、なんとかこのホテルを出たい、とブラッドリーに訴えた。これに対して、ブラッドリーはまず、「おれ」を説得しようとする。彼はこう言う。「スティーブ、おまえはそこにとどまる。リンディ・ガードナーがいかに重要な人物かわかってるのか。誰と仲良しで、電話一本でおまえのためにどれほどのことができるか知ってるのか。確かにトニー・ガードナーとは離婚した。けど、何も変わっちゃおらん。顔が新しくなって、リンディが後押しする。ドアなんて向こうから開く」。ここで、二点に注目したい。一つは「おれ」がリンディと出会ってから、なぜあれほど嫌気がさしたのか。リンディがトニーの音楽を「おれ」に聞かせて、それを褒めて、「おれ」の存在を完全に無視した。即ち、リンディは「おれ」の期待をすっかり裏切ったからである。もう一つは、同一の問題に、ブラッドリーは、「おれ」と全く違う考え方を持つことである。ブラッドリーは現実的な視点で、「おれ」の非日常の視点を相対化し、同一の問題をはっきりと対蹠的に捉えている。それによって「おれ」の未熟さを露出させているのではないか。次に、「おれ」の気分を慰めるために、ブラッドリーは嘗ての仲間、リーに頼んで、「おれ」を見舞いに来させた。リーの到来は、とてもよかった。「昔の仲間」の話を言ったり、ジェイク・マーベルが明日、このホテルで「年間最優秀ジャズミュージシャン賞」を授賞されることを、「妙な世の中」だと批評したりして、「おれ」の気分をすっかり転換させたのである。

「昼食後一時間ほどして」、リンディからの電話を受けた「おれ」は、「ノー」も言えずに、新しいシャツに着替えて、「リンディを唸らせそう」な「おれ」の CD を持って、隣の部屋に行った。また、「おれ」は、なぜリンディに「ノー」と言えなかったのか。自分にも分からないと「おれ」は呟くが、

実はここにこそ「おれ」の内なる世界が露出している。それは「おれ」の「気が弱い」からでもなければ、ブラッドリーに洗脳されたわけでもない。心の底に潜んでいる未来への憧憬であろう。

リンディに聴かせたのは「おれ」の「九番トラック」=《ニアネス・オブ・ユー》である。それを聞く前に、リンディはCDケースにある写真を見て、「あなたは写ってるの？」と言った。「右から二番目。アロハシャツ着て、アイロン台を持ってる男」と「おれ」は答えた。リンディはCDを見て、「おれ」を見て、「ちょっと、かわいいじゃない」と言ったが、「おれ」はその「口調には興奮のかけらもなく、声は確信を欠いていた。というより、はっきりと哀れみの響きがあった。」と感じた。「おれ」はリンディと会うのは二回目だが、互いに相手の素顔はもちろん見たことがない。問題は「おれ」の写真を見たリンディの声に、「哀れみの響き」を「おれ」が感じることである。この場合、「哀れみの響き」を感じているのは「おれ」で、それは「おれ」自身が「顔」にコンプレックスを抱いているからであろう。なぜなら、リンディの内面は「おれ」からは見えない。写真の「おれ」の顔を見てリンディが哀れんでいるだろうと憶測して、「おれ」はひそかに傷ついているのである。この「顔」に対する「おれ」のコンプレックスや傷つきやすさは、「顔」という外見で人間の価値が判断されてしまう社会の問題を反映している。

リンディは「おれ」が持ってきたCDを聴きたいが、どれにしましょうか、と言った。その時、「おれ」は自信満々で「九番トラック」、「《ニアネス・オブ・ユー》。おれのスペシャルトラックです」と答えた。その自信について、テクストには次のように語られている。

> 九番トラックを選んだのはよく考えてのことだ。このバンドのメンバーはみな一流で、個々に大きな野心を持っていた。それがなぜ一つのバンドにまとまったかと言えば、目的は一つ。これぞメインストリームジャズ、これぞ晩餐とともに聞く音楽――そう言えるサウンドを作り出すことだった。ここに収めた《ニアネス・オブ・ユー》は、最初から最後までおれのテナーをフィーチャーしていて、まあ、トニー・ガードナーの縄張りから百マイルもかけ離れているわけではないが、おれの誇れる演奏の一つだ。その歌ならありとあらゆるバージョンを聞いて聞き飽きてる？そういう人にはぜひ第二コーラスを聞いてみてほしい。あるいは、ミドルエイトから抜け出す瞬間を。バンドがⅢ―5からVIx－9に行き、おれが段階的に上昇していって、あの甘く優しいBフラットの高音を保ちつづける。こんなことができるのかと誰もが驚く。ここには、ほかのどのバーションにもない色彩が――憧憬と後悔が――あると思う。（第213－214頁）

しかし、その曲を聴いたリンディは、「おれ」の予想とは裏腹に、とても不思議な行動を取る。始めにトニーの曲を聴いた時と同じく、「スローなリズムに合わせてうっとりと体を揺らしはじめていた。だが、すぐにその動きからリズムが消えていき、ただの棒立ちになった」。そして、その包帯に隠れた表情はわからなかったが、「どさっとソファーにすわり込むしぐさは、とても期待を抱かせるものではなかった」。最後に、「あの歌に何か特別な思い出でもあるんですか」と聞いたら、リンディの「包帯の背後に怒りがあるように」「おれ」は感じた。さらに突然、笑い出し、「あなたの演奏はとてもすてき。これぞプロという演奏……」と言う。「おれ」の視点から捉えたリンディの行動には、何が隠されているか、「おれ」にはさっぱり分らかった。

ここで、まず、「おれ」の写真を見たリンディと、CDを聴いたリンディと反応のずれに注目したい。即ち、CDで「おれ」の《ニアネス・オブ・ユー》を聴きながら、リンディは自らの感情をコン

トロールするこができなくなった。最初に、トニーの曲を聴いた時と同じく、体を揺らしたが、すぐにそれを止めたのは、二人の曲の世界が全然違ったからである。そして、リンディのすべての表情は包帯に隠されていたにも関わらず、その背後に感じた「怒り」は、何を示唆しているのか。また、リンディの「短い、乱暴な笑い」は、何を意味しているか。これらの謎は、「おれ」との三回目の出会いで、すべて打ち明けられることになる。

三.「顔」を介さない心の触れ合い

「真夜中の散歩」から帰ってきたリンディは、「おれ」のドアの下から光が見えたからと、電話を掛けて来て、「おれ」にこの前のCDをもってすぐに来てほしいと言った。彼女の言った通りに、「おれ」は隣の部屋に行った。それから、大音量で「おれ」の《ニアネス・オブ・ユー》を聴くと、リンディは、音楽に合わせて、「われを忘れて溶け込んで」踊った。そして、「崇高よ。あなたはとってもすばらしいミュージシャン。天才だわ。」と言ったうえで、前回、この曲を聴いた時、なぜ変な反応をしたかを、「おれ」に向かって次のように説明してくれた。

> 「最初からわかってたの。ほんとに。だからあんなふうに反応しちゃって……気に入らないみたいな、見下すみたいな、ね？」リンディはおれの向いにすわって、溜息をついた。「トニーにはよく叱られた。昔からそうなのよ。直そうとして、どうしても直らない。誰かに出会うとするでしょ？　ほんとに才能のある人、神様に祝福されたような人に出会う。するとね、だめなの。いつも、あなたにやったみたいにしてしまう。本能的に。何なのかしら……よくわからない。たぶん嫉妬するんだと思う。（第221頁）

ここで、一回目のリンディの「おれ」の曲に対する反応――「気に入らないみたいな、見下すみたいな」――の裏には「嫉妬」があったことを、リンディは打ち明けている。リンディは有名人で人気者なのに、実は自分の才能にコンプレックスを抱いていて、無名のスティーブの才能に嫉妬しているのである。一方、スティーブはリンディの名声に嫉妬している。互いに自分にない物を相手に見て、嫉妬していることが〈機能としての語り手〉の視点からは見えていて、そこがこの短編の妙味の一つではないか。

リンディは真夜中の散歩中に見つけたトロフィーを両手に持って、「スティーブ、ここへ来て受け取って贈呈式をします」と言ってから、「年間最優秀ジャズミュージシャン賞は、あなたにこそふさわしい。おめでとう。年間どころか史上最優秀かもしれないわね」と言って、「おれ」に手渡し、包帯越しに軽くキスをした。さらに、ジェイクにトロフィーが授与されるという「不正がなされようとしていたのを、わたしが危うく阻止し、正義を貫いた」のは重要だと強調して言った。このリンディの行為に対し、「おれ」は感激するとともに、その「お気持ちも、栄誉も、全部いただきます」と言いながら、そのトロフィーを元の場所に返さなければならないと提案する。ここで、リンディの行為を考察しよう。このリンディの行為の意図は、世の中の「不正」を、「危うく阻止し、正義を貫」こうとするものである。従って、リンディの「キス」は、まさに天使が神様の代わりに「おれ」を祝福し、「おれ」の「天才の能力」を認めているようではないか。さらに、この行為は、現実の

「不正」を風のように吹き飛ばしてしまって、後に「正義」が登場し、新しい世界が開かれるのであろう。もし、現実の「芸能界」が暗闇の夜の世界だとすれば、リンディの行為は投光器のようなものとなって、夜空の星々のように希望を示唆していると理解されよう。

二人はトロフィーを持って、隠れ階段を下りて暗い空間の中に入って、それを返しに行く。その時、二人は受賞者についてこのように議論する。「おれ」は自分の考えが間違っていた、このトロフィーを返す必要がない、ほかのトロフィーも全部一緒にゴミ箱にでも放り込んだ方がいいと言う。「ジェイク・マーベルを今年の最優秀ジャズミュージシャンに選んだ審査員団なんだ。ほかだって推(お)して知るべし」で、「こんな選考はえてしてご都合主義だ」、と言うのに対して、リンディは「でも、本物だって何人かはいるかもしれない」、このジェイクも「死に物狂いで練習してこの結果になったのかもしれない」と言う。さらに、このような人を「少しは認めてやらなきゃ。あなたみたいな人の嫌なところはね、たまたま神様から特別な才能を授かったというだけで、何でもかんでも自分がもらわないと気がすまないことよ。その辺の連中より自分は偉い、いつでも先頭に立って当たり前――そう思ってるところ。あなたほど才能がなくて、ただがんばりだけで上を目指す人がたくさんいるのに、それがわからない」と反論する。ここで、視点人物の「おれ」が主張していることと、対象人物のリンディが反論していることとを比較してみると、現実世界では、「おれ」のように才能があって、物凄く頑張ったけれど、不遇のままの者もいる。ジェイクのように、才能がないのに、それなりに頑張っただけで、運がよく「年間最優秀ジャズミュージシャン」に選ばれる者もいる。要するに、この二人の意見は、どれも世の中の事実を表している。だとすれば、語り手を超えて語る＜機能としての語り手＞は、この事実を語ることによって、何を言おうとしているのか。即ち、「おれ」が語ったことを、リンディによって語られたことによって相対化してみると、このように理解できるのではないか。世の中で、「おれ」のように、才能が人よりずば抜けているからと言って、「年間最優秀ジャズミュージシャン」賞が思った通りに授賞されるとは限らない。不遇なことは、世の中どこにでもあるのではないか。こうして、＜機能として語り手＞は、思うようにならないのが世の常、自分の持っている物は当たり前で自分にない物を持っている者には嫉妬するのも人の常。そういう人の性(さが)を可笑しみと悲哀を込めて語っているのである。

リンディは今、確かに芸能界のスターである。だが、彼女はいかほど努力して、今の地位に達したのか。また、彼女の心の底にしまっている苦しみは何か。誰も関心を持たないだろう。「おれ」みたいに、「あの女はなぜあれほど祭り上げられたのか」と、他者の目はそればかりを見ているのではないか。しかし、事実はどうだろうか。まず、「おれ」とリンディの対話を見てみよう。

> 「あのね、スティーブ、わたし子供の頃は歌って踊れる女優になりたかったの。すごくなりたくて、だからすごく努力した。どれほど努力したか、神のみぞ知るよ。でも、だめ。何をやっても笑われた。この世は不公平だって恨んだわ。でも、少し大きくなってから、結局、それほど不公平でもないのかなって思うようになった。わたしみたいにとくに才能に恵まれてない女にも、チャンスがないわけじゃない。（中略）他人の目なんか気にしてちゃだめだけど、でも絶対にチャンスはある」
>
> 「あなたなら、胸を張って言えますね」
>
> 「この世って、つくづく面白いわ。絶対に目のつけどころがよかったと思う……あ、あなたの奥さんのことね。手術を受けなさい、なんて」（第 244 頁－245 頁）

この対話に関して、二点を考える必要がある。第一に、リンディの経験は、「おれ」のこれまでの、この世に対する不公平や恨みなどに光を当てて、それを相対化して見せていること。即ち、今のリンディは確かに「胸を張って」それを言える。だが、「おれ」自身は、なぜ「胸を張って」それを言えないのか。「とくに才能に恵まれていない女」のリンディに比べて、「おれ」は天才で才能があるだけでなく、別れた奥さんから金をもらって、「顔」にボリスという最高の医者の手術を受けているではないか。これこそ「希望らしきもの」と言えるのではないか。第二に、リンディの陽気さ。「この世って、つくづく面白いわ」というリンディの語りは、はっきり彼女の人生観を表している。気の重い状態に落ちている「おれ」を見て、リンディはこのように励ましてくれる。「大丈夫よ、ボリスは最高だから。」「これはわたしの三回目。ボリスとは二回目。大丈夫、問題ないわよ。きっと自分を見間違える。絶対よ。そして、あなたのミュージシャン人生が離陸するのよ」。（第 252 頁）かくして、医者が直したのが「顔」だとすれば、リンディの語りは、「おれ」の心の問題を抉り出し見せていると言えよう。第三に、人生のチャンスとは、「年間最優秀ジャズミュージシャン賞」をもらえるかどうかの問題ではない。二人が最後に、元の場所に返すつもりのトロフィーを、「夕食の食べ残しの横に」置いたのは、もはやそんなものがどうでもいい、と二人が思っているからである。即ち、リンディの人生観は「おれ」の人生観をくっきりと相対化し、「おれ」の「ミュージシャン人生が離陸」する秘訣を教えてくれたのである。

リンディはもう一つ大事なことを「おれ」に向かって語っている。それは別れた妻のヘレンのことである。

> 「スティーブ、聞いて。奥さんが戻ってくれるといいし、わたしもそれを願ってる。でもよ、戻ってこなかったときは、それはそれで頭を切り替えなくちゃ。奥さんはすてきな人だったんでしょう。でもね、人生って、誰か一人を愛することよりずっと大きいんだと思う。あなたはその人生に出ていくべき人よ、スティーブ。（中略）わたしをご覧なさい。この包帯がとれたって、はたして二十年前に戻れるかどうかわかりゃしない。それに独身だったときなんて、もう大昔だしね。でも、わたしは出ていって、やってみる」（第 254 頁）

中島京子は、「この少し頭が弱く、衝動的で、能天気とも言える美貌の持ち主だけがシニカルな短編集にあって、救いの女神のようにまっすぐに、才能の、あるべき姿を信じている。」[7] と指摘している。しかし、リンディは「頭が弱く、衝動的で、能天気」なわけではなく、「神のみぞ知る」ほど努力を重ねてきて今の地位を築いた。確かに「まっすぐに、才能の、あるべき姿を信じている」が、リンディが「救いの女神」と言えるのは、彼女の持つ人生観によって「おれ」に勇気を与えていることであろう。「人生って、誰か一人を愛することよりずっと大きいんだと思う。あなたはその人生に出ていくべき人よ。」と、妻に去られ、才能に恵まれながら飛躍できないでいる「おれ」の背中を押しているのである。

結びに

この作品は、「顔」を重要なモチーフとして、才能はあるが「顔」の醜さゆえに不遇だと思ってい

る「おれ」が、才能には恵まれなかったが努力によって道を切り拓いてきたと思っているリンディと出会い、「顔」を介さない交流によって、人生の転機を迎える物語と言えよう。まず、整形手術をするしないをきっかけに、「おれ」とヘレンは表面から見ると、とてもいい夫婦なのに別れてしまう。その深層に何が隠れているのか。ヘレンは「おれ」の心をよく理解しているのに、「おれ」はヘレンの心をよく分かっていない。その証拠は、「おれ」と別れた時に言ってくれた二つのことである。一つは離婚する代わりに、高校時代から憧れていたプレンダガストという、未来の夫から金を出してもらって、「おれ」を最高の整形外科医に手術させること。その理由は、「おれ」が「顔さえ直せば、もう怖いものはない」、「第一線に躍り出る。出ないわけがない。あなたの才能をもってすれば……」ということである。もう一つは、「おれ」が整形手術を受けたくないと言ったのに対し、ヘレンは「要するに何なのよ。残りの一生、あのクロゼットで演奏してれば幸せってこと？いつまでもどんくさくありたいってことなのね？」と、悲しそうに怒ったこと。よく考えると、この二点はいずれも、ヘレンが「おれ」の心の深い処に隠れた心理を見抜いていることがわかるが、「おれ」自身はそれを直視できない。もっと率直に言えば、ヘレンは「おれ」が何を欲しがっているかを知っているのに、ヘレンが何を欲しがっているかを、「おれ」は分かっていない。なぜなら、ヘレンが「部屋の中を歩き回る姿が悲しそう」に見えたにも拘わらず、その心を「おれ」は見抜いていない。これこそヘレンが「おれ」と別れた理由ではないか。だとすれば、「おれ」の問題はどこにあるのか。

この問題は、非日常の空間で芸能界のメジャー、リンディとの付き合いによって、「おれ」の心に隠れた影が明らかにされている。まず、自己愛である。現実の世界で、「おれ」はサックスの「メジャーになる素質は十分」あるのに、醜男のために芸能界のスターになれない。逆に、リンディのような人は、才能がないのに、大人気でスターになっている。これは「おれ」の苦しみであり、社会に対する不平不満である。だが、テレビやマスコミで知ったリンディではなく、実際に彼女と付き合っているうちに、そのイメージが変わっていった。第一に、彼女は音楽をよく分かっていること。「おれ」の CD を聞いて、昼の世界では嫉妬心のために、「おれ」を評価してくれなかったが、夜の世界では、今までの誰よりも「おれ」のことを理解してくれたし、しかも大いに評価している。彼女は「おれ」にこう言ってくれる。「年間最優秀ジャズミュージシャン賞は、あなたこそふさわしい。年間どころか史上最優秀かもしれないわね」。第二に、リンディも苦しみは「おれ」のそれと同じなのに、彼女のやり方は「おれ」と全然違う。彼女は最初に「神のみぞ知る」ほど努力したのに、何をやっても笑われたし、だめであった。でも、この世の不公平を恨んでも、何も変わらない。「わたしみたいにとくに才能に恵まれていない女にも、チャンスがないわけじゃない。他人の目なんか気にしてちゃだめ」という人生観で、自らの世界を変えたのではないか。こうして、リンディの人生観は、「おれ」の人生観を相対化し、「おれ」の脱皮を促しているのである。

現実の社会では、確かに「おれ」のような「天才」もいれば、リンディのような「努力家」もいる。しかも、審査員団によって、年間の優秀ジャズミュージシャン賞に選ばれたのは、「天才」の人間ではなく、「努力家」の人間であることもよくある。例えば、今年の最優秀ジャズミュージシャンに選ばれたジェイク・マーベルは、「おれ」のような天才ではないが、「死に物狂いで練習し」た結果であるかもしれない。とすれば、現実の社会は「ご都合主義」で、不公平だと断定はできない。要するに、現実の世界で、確かに個々人への評価に問題がある。しかし、いつも「その辺の連中より自分は偉い」という考えも正しいものではないのである。

テクストの終わりに、「おれ」はヘレンに電話を掛けて、夫や妻が電話の最後に決まってつける

「愛してるよ」を言うと、ヘレンも同じ言葉を返してくれたが、「いったいどういう意味だったのだろう。」と「おれ」は疑問に思う。その言葉の中身は確かに「ズレ」がある。さらに末尾、「おれ」は「リンディの言うとおり、頭を切り替える必要があるのだろうか。人生は、ほんとうに一人の人間を愛することより大きいのだろうか。これは人生の転機なのか。おれはメジャーになれるのか。はたして、リンディは正しいのだろうか。」と疑問形で問いかけて語り終えている。リンディの言葉をそのまま鵜呑みにしているわけではない。〈語り手〉を超えて語る〈機能としての語り手〉は、「おれ」とリンディの双方を相対化する視点に立ち、「顔」という仕掛けを通して、人生の悲哀を軽妙な筆致でコミカルに描き出しているのである。

注

1）カズオ・イシグロ：『夜想曲集』土屋政雄訳「訳者あとがき」、早川書房、2017年10月、第307頁。

2）インタビュアー：NHKロンドン支局長　税所玲子　カズオ・イシグロ氏　単独インタビュー全文、第3頁。

3）鷲野博文：『夜想曲集――音楽と夕暮れをめぐる五つの物語』、松山大学『言語文化研究』第32巻1-2号、2012年、第209頁。

4）中島京子：「笑いと音楽と救い」、カズオ・イシグロ：『夜想曲集』土屋政雄訳に収録、早川書房、2017年10月、第315頁。

5）〈機能としての語り手〉に関しては、田中実「『舞姫』の〈語り手〉「余」を相対化する〈機能としての語り手〉―二人の女性と識閾下の太田豊太郎」（『第三項理論が拓く文学研究／文学教育』、明治図書、2018年10月）参照。

6）大森荘蔵：『流れとよどみ―哲学断章―』、産業図書、1981年5月、第25-26頁。

7）中島京子：「笑いと音楽と救い」、カズオ・イシグロ：『夜想曲集』土屋政雄訳に収録、早川書房、2017年10月、第319頁。

（中国　西安交通大学外国語学院　教授）